

音韻書簡——韻鏡の配置に関する問答

中村雅之

古いパソコンから20年前のメールが見つかった。韻鏡の配置に関するT氏の質問とそれに対する私の返信である。常識的なことのようにもあらながら、実は中古音の勉強を始めた人をしばしば惑わす問題を含んでいるので、ここに公開してみようかという気になった。私の説明の中には冗談めいた作り話もあるが、手直しをせずにもとのまま再録した。

① T氏の質問状(1998年4月13日)

【タイトル：音韻学質問箱】

問：平山久雄「中古漢語の音韻」(『中国文化叢書』1「言語」所収)132頁に、次のような一節があります。

歯音の場合は、3等韻母は(正歯音3等)と結合するほか、(正歯音2等)、(歯頭音)とも結合するので、2等および4等の欄にも3等韻母が分布することになっている。……このように越境した部分でその等位本来の韻母と衝突することがないように、巧みに工夫されている。例えば仙韻の歯頭音を声母とする小韻は第21転、第22転の歯音4等欄に配され、先韻の歯頭音小韻が第23転、第24転の歯音4等欄に配されるのと衝突しないのである。

この箇所がよく理解できません。僕は「例えば」以下を、次のように読みました：本来3等韻母を持つ仙韻で、歯頭音と結合するものを21・22転4等欄に、正歯音3等と結合するものを23・24転3等欄に分けて配置し、4等韻母を持つ先韻と23・24転において衝突しないようにした。

しかし、このように考えると、131頁下方にある、「同じく仙韻開口の韻母でも、第23転3等に配されるものと、21転4等に配されるものとは、じつは異なった韻母なのである。」という記述に矛盾してしまいます。これはどうしてなのでしょう。どこで誤解が生じたのでしょうか。

お暇がありましたら、ぜひお教え下さい。ではまた。

② 中村の返信(1998年4月14日)

御質問の件ですが、問題は声母の区別と韻母の区別を混乱している点にあります。平山氏が、131頁において、3等と4等が「じつは異なった韻母なのである」と言っているのは、文字通り韻母のことについて言っているのです。より正確には、介音が異なっているわけですね。ただし、ここで言っているのは、歯音以外の声母(特に牙音)を想定しています。歯音はというと、132頁の2行目にある「声母の違いが等位の違いによって表わされている部

分」というのに相当します。つまり、歯音以外では、3等と4等の区別は韻母（介音）の区別を表しており、歯音の場合には声母の区別を表している、というのが平山氏の説明の意図するところです。

それでは平山氏のこの説明は正しいのでしょうか。まずは平山氏の説明にのっとって具体的な音価を考えてみましょう。歯音以外の場合（例えば牙音）には、146頁以降の音価表にあるように、仙韻3等はゆるんだ介音、仙韻4等は狭い介音であるが、歯音の場合は3等と4等とはともに狭い介音で同韻母である。このようになります。この音価自体は、中古音（切韻）の推定音価としては是認できるものです。問題は、それを韻鏡の配列で説明したところにあります。つまり、韻鏡の体系と切韻の体系を同一視した、あるいは説明の便宜上ほぼ同じものと扱ったわけです。しかし、3等の介音が歯音と牙音とで異なっていたという推定が韻鏡の構造から可能でしょうか。不可能です。もっとも素直な読み取り方は（おそらく貴君も考えた通り）、韻鏡においては声母のいかにかわらず、3等がゆるんだ介音、4等が狭い介音を表している、というものです。

つまり、歯音3等の介音は切韻の時代と後の韻鏡の時代では異なっているのですね。切韻の時代には狭い介音だったのが、韻鏡の時代にはゆるんでしまい、現代では直音になってしまったと考えられます。これは歯音3等の声母が徐々にそり舌化した結果でしょう。

ここで未来のおとぎばなしをひとつ。日本には五十音図というものがありますね。歴史的にも構造的にも中国の韻図に相当するもので、平安後期に作られたと思われます。

さて、西暦二五〇〇年に中国は突如帝国主義に目覚め、日本を壊滅的に破壊し、占領下に置いた。日本語の使用を禁じ、すべての民衆に漢語のみを話すことを強要。日本語は完全に絶えてしまった。西暦三〇〇〇年、言語学者 H 氏が東京で一枚の古紙を発見、「五十音図」と題す。漢字のタイトルから察するに、音節表のようだと直感。本文は漢字ではない文字で書かれてあり、古くに滅んだ日本語ではないかと思われた。二五〇〇年に焦土と化した日本は、日本語の文献はほとんど消滅、唯一残されたものは1998年出版の中国語入門書の第1頁のみであった。言語学者 H 氏はさっそく新出の「五十音図」との比較をおこなった。

<資料A：中国語入門書残巻1998年>

漢語入門 一九九八年横浜書店出版

Ni hao ma? (にい はお ま)

Hen hao. Xiexie. (へん はお しえしえ)

<資料B：五十音図2498年>

五十音図 二四九八年東京書店出版

あ い う お

え

か き く こ
け
さ し す そ
せ
た ち つ と
て
な に ぬ の
ね
は ひ ふ ほ
へ
ま み む も
め
(後欠)

言語学者 H 氏は考えた。

1. 日本文字は音節文字のようである。
2. 資料Aから、「は(ha)」「お(o)」「ま(ma)」「へ(he)」「ん(n)」「し(xi)」「え(e)」の対応が考えられそうだ。「に(ni)」も考えられるが「い」は不明。
3. 前項の結果を資料Bに当てはめると、「は」「ま」から第1段目が母音-aを伴うものらしい。第2段は「え」「し」「に」「へ」から母音-iあるいは-eを伴う。第4段は「お」から母音-oを伴う。第3段は例を欠くが、-uを考えるのが最も自然である。
4. とすれば前前項で不明だった「い」は母音のiであろう。
5. 理由はわからぬが、資料Bでは母音-eを伴う音節のみを別立てにしている。

H 氏の発見は中国じゅうの言語学者の知るところとなり、大きな反響を読んだ。貧乏学者 N 氏も、その発見に興味を示した。H 氏の説明はおおむね正しいように見えたが、最後の第 5 項に引っ掛かりを覚えた。そしてある日悟ったのである。これは韻鏡と同じだ、と。25 世紀末の日本語では母音の e が既に i に変化していたのであろう。しかし何らかの理由で五十の音節を規範として維持しようとした。そのため、おそらくはもともと独立していた e の段を i 段と同じ等位に置くことで対処したのだ。今はなき古き五十音図が切韻、2498 年の五十音図が韻鏡に相当するのだ。したがって、2498 年当時の日本語は 4 母音体系である。

以上が未来のおとぎばなし「日本語の解説」です。ひょっとしたら韻鏡の説明よりおとぎばなしの方が難しかった？

いずれにしても平山氏の説明では、切韻の体系と韻鏡の体系を区別していないため、かえって韻鏡の構造が理解しにくくなっています。未来の言語学者 H 氏のように、同じ等位に

異なる韻母を推定するはめになったのです。

韻鏡の構造についてはすっきりと説明したものが無いので、理解しにくい個所も多いと思います。上の説明でわからなかったら、またメールをください。

③ T氏の質問状その2 (1998年4月17日)

【タイトル：音韻答問 (改題)】

題名を変えてみました。『語法答問』みたいでカッコいいかなと思って。

さて、長文のお答え感謝します。全くご想像の通り、「未来のおとぎ話」の方が難しかったです。お答えに関しては、おおむね理解できたように思います。考えてみると、『韻鏡』自体は非常に明快な体系を持っているのですね。そこから『切韻』の体系を推定するから話がややこしくなる。前に中村さんが「子供の顔から親の顔を推定するようなもの」と言われていたことを思い出した次第です。

とはいえ、自らの貧弱な頭脳では、まだ得心いかない部分があるのですね。以下に書いてみます。

1：『韻鏡』において、仙韻の3等と4等との違いが、声母と介音両方にわたるものであるとすると、そもそもなぜ『韻鏡』作者が仙韻を21転4等・23転3等に分けて配するのか。例えば、21転の4等に同撰・同開合である先韻を配したとき、何か問題があるのか。

2：『韻鏡』作者は、知組や莊組が、(2・3・4等ではなく、3・4等でもなく)2・3等である、ということを明示しているのか。36字母図にはないようすが。

だいたいこんなところですよ。何かまだ混乱しているようで、うまく伝わるか自信がないのですが。この「中古漢語の音韻」は、いままで何度かチャレンジしているのですが、いつもこのへんで挫折するのです。とはいえ、その先にある音価推定の項などは、今までの印象と全然違って、気分が盛り上がります。

ご返答いただけるのであれば、もちろん電話でかまいません。ではまた。

④ 中村の返信 (1998年4月28日)

韻鏡に関する質問をもらいながら、なかなか返事が出せなくてすみませんでした。授業が始まって忙しかったということもあるのですが、今回の質問にはよい答えが出せなかったと言うのが原因です。

まず、第一点。21転の4等欄に先韻を配置することは、確かにありえたと思います。ただ、どういう訳か、4等韻は(先韻に限らず)可能な限り1等韻・2等韻・3等韻と共に配列されているようです。つまり山撰の場合には21転よりも23転の方が優先的に配置されたのではないかと考えられます。

韻鏡の作者の意図がどこにあったかはわかりませんが、一つの可能性として、舌音4等欄に空白を作らないための措置であったかも知れません。23転に限らず、優先的な転図においてはなるべく空位のない方が望ましいことは言うまでもないでしょう。ここで優先的な

転図というのは、実際の発音を知るのに参考にするための最も望ましい形式を持っている、またそれゆえに最も注意深く韻の配置を行う転図ということです。例えば、23 転を見てしまえば 21 転を見る必要がない。なぜなら 21 転の音節はほとんど 23 転にも見えているからです。4 等欄に配置されるべきものとしては 3 等 A 類と 4 等韻がありうるけれども、3 等 A 類は常に舌音が空位になるのに対して、4 等韻は（少なくとも理論上は）そのようなことがない。それゆえに優先的な転図に配置すべきものとして 4 等韻の方が選ばれた、というのが私の仮説なのですが、正直言ってあまり自信がありません。

第二点について。舌音の 2 等と 3 等が同じ声母であること、そしてその声母が 1 等および 4 等と異なることは、実際に個々の漢字を声に出して読んでみればわかることです。唐代においても現代においても同様です。そして韻鏡巻頭の 36 字母図と照らし合わせれば、2 等・3 等が知組であることは一目瞭然というわけです。

今回はあまり歯切れがよくなかったかと思いますが、これにこりずにどしどし質問してください。私の方も考える訓練になりますので。